

『クラスの大嫌いな女子と結婚することになった。』

Blu-ray&DVD 発売記念イベント「北条家寝室内覧会」

朗読劇シナリオ

【登場人物】

北条才人

桜森朱音

石倉陽鞠

北条糸青

■導入シナリオ

朱音「ふう、たくさん遊んだわね。明日も学校があるし、そろそろ寝ましょ」

〈陽鞠、駄々っ子のように。〉

陽鞠「えー、まだ遊びたいよー。せっかくのお泊まり会なんだからー」

糸青「シセもまだ遊び足りない。学校を破壊してでも遊び尽くす」

朱音「破壊しないで」

〈朱音、母親のように言い聞かせる。〉

朱音「とにかく、もう寝るの」

陽鞠「じゃあ、もう一つだけゲームしようよ！ ね、ね！」

朱音「うーん、一つだけよ？」

陽鞠「ふふふ、朱音大好き♪」

〈朱音、仕方なさそうに。〉

朱音「もう……」

陽鞠「このゲームに勝ったら、そうだな、」

〈朱音と才人、同時に驚く。〉

朱音「は!？」

才人「はあ!？」

朱音「い、いきなりなにを言い出してるのよ!？」

才人と添い寝なんて、そんなやらしいことできるわけないじゃない!？」

陽鞠「え〜？ それなら朱音は毎晩、才人くんとやらしいことしてるってこと?？」

朱音「うぐっ！ そ、そういうわけじゃないけど……」

陽鞠「ねっ、せっかくのお泊まり会なんだし、やろうよ！

名付けて！ 『お泊まり会ファイナルバトル・才人くん添い寝カップ』!？」

朱音「なによその名前は……そんなのやるわけ……」

陽鞠「あれー？ 朱音は怖いのかな？ 勝負する前から負けるって思ってるのかな?？」

〈陽鞠に乗せられ、朱音が奮起する。〉

朱音「も、もちろん私が勝つわよ！ 負けるわけがないわ！ 勝負しようじゃないの!？」

陽鞠「やった♪ さっすが朱音!？」

糸青「さすが朱音。ちよろい」

陽鞠「じゃー、ゲームの始まりだよ!？」

朱音「おー!」 糸青「おー」

〈陽鞠、朱音、糸青、げんこつを突き上げて意気込む。〉

才人は完全に置き去りにされている。〉

才人「おーい、俺の意志は〜？ みなさーん？ おーい?？」

■朱音ルート

〈朱音、ゲンコツを突き上げて無邪気に跳びはねる。〉

朱音「やったー！ やったわ！ 私の勝ちよー！ 大勝利！」

糸青「完敗」

陽鞠「朱音、本気出しすぎだよ。そこまで才人と一緒に寝たかったんだね」

朱音「えっ……？」

陽鞠「ごめんね、気づかなくて。」

朱音は才人くんの腕枕じゃないと寝付けないカラダになっちゃってたんだね。

ラブラブなんだね」

朱音「そそそんなことあるわけないじゃない！ 私は勝負に勝ちただけ！

才人と添い寝なんてゾツとするわ！

才人と添い寝するぐらいなら、ラフレシアと添い寝した方がマシよ！」

才人「腐臭漂う世界最大の花と!？」

陽鞠「そっかー。だったら私が代わってあげるよ！」

朱音「えっ……」

糸青「うむ。朱音は無理しなくていい。兄くんことはシセたちに任せて」

〈朱音は思考が追いついていない。〉

朱音「えっ……えっ……」

陽鞠「ほーら、才人くん。私の隣で横になって♪ 一緒に寝るよ」

才人、たじろぐ。

才人「いや、俺は……」

陽鞠「糸青ちゃん、捕まえて！」

糸青「承知」

才人「うお!? なんだこの力は!? シセってこんなに強かったか!？」

陽鞠「逃がさないよ、才人くん。今夜は寝かさないからね？」

才人「一緒に寝るとか言ってたのに!？」

陽鞠「寝かさないようにした後、疲れ果てさせて寝かすんだよ♪」

才人「なぜ疲れ果てる!？」

陽鞠、悪女のように笑う。

陽鞠「ふふふ」

才人「というか暑苦しい！ 二人とも少し離れろ！」

糸青「これ以上離れると、ベッドから落ちてしまう。兄くんに密着するしかない。ぺたぺた」

陽鞠「あつ、ずるーい♪ 私も才人くんにぺたぺたする♪ ぺたぺた♪」

〈朱音、見ていられなくなつて才人と陽鞠のあいだに割り込む。〉

朱音「ううっ！ ああもうっ！ やっぱり私も一緒に寝るわ！」

陽鞠「わっ!?! 朱音が割り込んできた! 急にどうしたの!?!」

朱音「このまま放っておいたら、大変なことになりそうだから! 私を監視役!

あんたたちが変なことしないよう、同じベッドで見張っておくわ!」

陽鞠「つまり、ヤキモチ?」

朱音「ヤキモチじゃないわ!」

糸青「朱音はあいかわらず素直じゃない。一緒に寝たいなら、そう言えばいいのに」

朱音「寝たくないわー!」

〈ぎゅうぎゅう詰め of ベッドで才人が苦しまる。〉

才人「うう……狭い……ぎゅうぎゅう詰めすぎる……眠れん……」

朱音「才人が小っちゃくなればいいんじゃないかしら。五センチくらいに」

才人「無茶言うな!」

陽鞠「えっ、才人くんって五センチなの!?! 意外と小っちゃいんだね!」

才人「なんの話だ!?!」

糸青「寿限無、寿限無、ごこうのすりきれ」

才人「なぜ急に寿限無の詠唱を始めた!?!」

朱音「ちょっと静かにして! 今エスぺラント語の子習をしているのよ!」

才人「なぜ急にエスぺラント語を!?!」

陽鞠「きゃっ、才人くんのえっち! そんなどこ触っちゃダメだよっ♪」

才人「静まれ! 静まれ! 俺を寝かせろっっっっ!」

■糸青ルート

糸青「おー。勝ったー」

陽鞠「負けた〜」

朱音「糸青さん、すごいわね。さすがの妹力というか。私までぐっと来ちゃったわ」  
陽鞠「ねー。学校に糸青ちゃんのファンクラブがあるのも納得だよ」

糸青「ふふふ。これが生まれたときから一緒に過ごしている兄妹のチカラ。

兄くんはもらっていく」

才人「まあ、昔から一緒に寝てるし、シセなら問題ないか。ほら、隣に来いよ」

〈陽鞠、あえて大仰に驚く。〉

陽鞠「才人くんがっ……糸青ちゃんを口説いてるっ……!!」

〈糸青、わざとらしく。〉

糸青「きゅんきゅん」

才人「いやいや！ そんな深い意味はないからな!？」

陽鞠「深い意味もなしに口説くの!？ 才くんはタラシだよ!」

朱音「最低。死ねばいいのに」

才人「俺が死に値する罪を犯したか!？」

〈糸青、ベッドによじ登る。〉

糸青「んしょ。兄くん、ふつつかものですが、よろしくお願いします」

才人「なんだその挨拶は」

糸青「シセは兄くんに腕枕を要求する」

才人「ほら、これでいいか？」

糸青「ん。兄くんの腕は世界最高の枕。

宇宙に行くときは腕だけでも切り取って置いていってほしい」

才人「怖いことを言うな。宇宙に行くときはシセも一緒だ」

糸青「嬉しい。兄くとシセはいつまでも一緒」

才人「ああ。もう寝るぞ」

糸青「すんすん。兄くん、いい匂い。ミトコンドリアの匂いがする」

才人「どんな匂い？ ミトコンドリアってどんな匂い？」

糸青「兄くんの体温に包まれていると、安心して眠くなっていく」

才人「まあ、それは俺も同じだが」

糸青「兄くん、頭撫で撫でして」

才人「よしよし」

糸青「気持ちいい……。ずっとこうしていたい……」

〈家族らしくほのぼのとした雰囲気のかんと糸青を、少し離れたところから朱音が眺めている。ヤキモチと、家族だから仕方ないという気持ちの板挟みで、微妙な感情。朱音はす

ねたように小声でつぶやく。〈

朱音「うう……ちよっと、イチヤイチヤしすぎじゃないかしら……」

陽鞠「朱音ってば、才人くと寝られなくて寂しいの？」

朱音「ち、違うわよ！ 私はもう大人なんだから一人で寝られるわ！」

陽鞠「えー、でも寂しそうな顔してるよ？」

朱音「そんなこと……」

陽鞠「大丈夫、私が朱音の寂しさを埋めてあげるから！ こっちの布団で、二人で寝よっ♪」

朱音「きゃっ!? ちよっと、急に引っ張らないで」

陽鞠「いいから、ごろんってして。私の腕の中に、おいで〜♪」

朱音「し、仕方ないわね……」

陽鞠「ぎゅっ♪」

〈陽鞠が朱音を胸に抱き締め、朱音は気が抜けてとろける。〉

朱音「ふあ……」

陽鞠「朱音って、私にハグされるの大好きだよね〜。顔がとろけちゃってるよ？」

朱音「と、とろけてないわよ……。ちよっと、気が抜けちゃっただけで」

陽鞠「いいよ〜、このまま眠っちゃって」

陽鞠、可愛らしくあくびする。

陽鞠「私も……眠くなってきたから……」

朱音「おや……すみ……」

陽鞠「おやすみい……」

■陽鞠ルート

〈陽鞠、大はしゃぎで飛び跳ねる。〉

陽鞠「やったー！ 才人くんの添い寝権ゲットだー！」

糸青「陽鞠、敵ながらあっぱれ。執念の勝利だった」

朱音「仕方ないわね。こんな粗末なモノで良ければ持って行って」

才人「モノ!? 俺に選択の余地はないのか!?」

陽鞠「多数決で決まったことだよ。反対したのは才人くんだけ」

才人「くそっ、民主主義の弊害が!？」

陽鞠「諦めてこっちにおいで、うりゃ♪」

〈陽鞠が才人をベッドに引っ張り込む。〉

才人「うおっ!？」

陽鞠「毎晩、朱音と才人くんが寝ているベッドで、今夜は私と才人くんの二人つきり。

うふふ……なんだかイケナイことをしてる気分♪」

才人「こんな悪い顔の陽鞠は初めて見た」

陽鞠「えっ!? そ、そうかな!? 私、悪い顔なんてしてないよ!？」

今夜は朱音の目の前で才人くんをムニヤムニヤしちゃお……

なんて全然思っていないよ!？」

才人「ムニヤムニヤってなんだ!？」

朱音「私の目の前でなにをするつもり!？」

陽鞠「それは、その、もうっ、そんな大胆なこと私の口からは言えないようっ!？」

朱音「言えないようなことをするの!？」

陽鞠「あ、今夜は熱いな、熱帯夜だな、

びしょびしょにならないよう服を脱いで寝た方がいいかも」

才人「そうか今すぐクーラーをつける！ それで問題ないだろ!？」

陽鞠「ダメだよ才人くん！ 脱げるときは脱がないと！

それが私たちにできる環境保護、クールビズだよ！ 価値観アップデートしてこ!？」

才人「難しい言葉で蛮行を正当化しようとするな!？」

陽鞠「いいから、いいから♪ とりあえず一枚脱いじゃおっ!？」

朱音&才人「きゃー!？」

朱音「ちょ、ちょっと陽鞠!? いくらなんでも服を脱ぐのはダメよ!？」

陽鞠「えー? ダメだってルールは聞いてないよー? 今さら変えちゃうのー?」

朱音「そ、それは……でも……」

陽鞠「よーし、もう一枚脱いじゃおっ! ううん、めんどいから一気に十二枚脱いじゃお!？」

朱音「十二単!? 平安時代なの!？」

糸青「シセも脱ぐ。よいしょ」

才人「なんでだよ！」

糸青「陽鞠の主張にいたく感服したから。今夜は皆ですっぽんぼんになるべきと判断した」

才人「その判断は間違っているぞシセ！」

陽鞠「ほら、才人くんも脱いで脱いで。そして、お布団の中に入って、ね？」

朱音「大変だわ！ 才人が陽鞠に食べられちゃう！ 助けないと！」

糸青「そんなことよりシセはおなかすいた。夜食にステーキ焼いてほしい」

朱音「ステーキは重すぎるでしょ！」

糸青「間違えた。付け合わせにハンバーグも追加」

朱音「もはや付け合わせじゃないわよ！ 今それどころじゃないから！」

糸青「だったら朱音を食べるしかない。はぐはぐ」

朱音「ちよっ、糸青さん!? 私は食べ物じゃないわ！」

陽鞠「じっとしててね、才人くん。ぺろって食べちゃうから♪」

糸青「いただきます」

陽鞠「いただきます♪」

〈才人と朱音、同時に助けを求める。〉

朱音「助けて〜！」

才人「助けて〜！」